

2026 年度入学者選抜 III期

心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野

解答例

■ I.

- a. 脱中心 b. ソマティック・マーカー c. アドボカシー（権利擁護）
d. 要保護児童 e. 二次的要求 f. コルサコフ症候群 g. SD 法（セマンティック・ディフ
ァレンシャル法） h. 扁桃体
i. 相互作用 j. いじめ k. 障害者差別解消法（障害を理由とする差別の解消の推進に関する
法律） l. パス解析
m. ホールディング(holding) n. 操作的定義 o. パーソン・センタード（ケア）
p. ダークトライアド q. 中心転換（Centering） r. REM 睡眠期 s. 直接因子
t. 健康増進（法）

■ II.

1. 回答のポイント

クライアントを中心とした支援を基本とする（安全、尊厳、意思の尊重）

- ① チームでクライアントの問題に対する見立てと支援方針の共有、役割分担を行う
- ② 心理支援について、専門的立場から支援への貢献可能性と限界を説明する
- ③ チーム内では、共通言語（理解できる）、および時間軸を共有したコミュニケーションを行う
- ④ 守秘義務と情報共有のバランス（倫理的配慮）を保つ

2. 回答のポイント

トラウマ・インフォームドケア（TIC）とは、トラウマを理解した関わりを指し、トラウマの知識を周知・実践するアプローチである。支援において、問題行動を個人の性格や病態に帰属せず、トラウマの可能性を前提とした関わりを提供する。トラウマは氷山のようなものであり、表面の言動は一角に過ぎず、その背景には過去の逆境による慢性的な過覚醒等の影響がある。TIC という「メガネ」を用いて行動の背景を理解し、安全・信頼・協働・エンパワメント等を重視した対応により、再トラウマ化を予防しながら回復を支援できる。支援者自身も二次的外傷ストレスの影響を受けるため、組織全体で TIC を実践し、セルフケア体制を整えることが不可欠である。

他に、トラウマケアの3段階（のうちの第1段階：安全の確保・安定化）、4つのR（認識/理解、徴候の気づき、対応、最トラウマ化の防止）、3つのE（出来事、体験、影響）などについて適切に触れていたら加点。

3. 回答のポイント

「新しいカウンセリング法は従来法よりも抑うつ症状を改善する効果がある」という対立仮説を検証するためには、無作為化比較試験（RCT）を用いる。対象者を無作為に新しいカウンセリング群と従来法群に割り付け、両群の介入前後の抑うつ症状の変化を測定、比較する。分析には統計的検定を用い、帰無仮説「効果はない」の棄却を目指す。対象者のバイアスを減らすため背景条件も均質化し、介入内容を標準化することが重要である。これにより新旧カウンセリング法の効果差を客観的に検証できる。

4. 回答のポイント

- ①批判的にならない。
- ②個人の結果ではないことを強調する
- ③発言の心理的安全性を保障する。
- ④ ほめることの効用を示す。
- ⑤具体的なほめ方を例示する。
- ⑥ロールプレイを行う。
- ⑦アクションプランを作成する。
- ⑧わかりやすい資料を作成する。

■ III.

介入研究の目的や仮説を正確に把握した上で、提示された分析結果（表データ）を適切に読み解き、プログラムの有効性に関する仮説の検証結果を論理的に説明する能力を評価することを意図して出題している。

著作物の著作権許諾処理の問題により解答または解答例を公表することはできない。